

謝 辞

望月先生に初めてお会いしたのは8年前、2年生のゼミ説明会の時である。先生が、朝鮮漢字音等の研究で名高い河野六郎博士の高弟であったことを露程も知らぬ私は、無謀にも「中国・朝鮮・日本漢字音の研究がしたい」と望月ゼミの門を叩いたのであった。

私は3年生から修士、博士まで合計7年間先生にご指導頂いた。「漢字音の研究がしたい」と思ってゼミに入ったのだが、何よりも驚いたのが中国語音韻学の難しさであった。用語も理論も手法も難解なため、なかなか理解できずに悩んだのも一度や二度ではない。それでも途中で投げ出すことなく研究が続けられたのは、先生のご指導とお人柄のお陰である。先生は非常に誉め上手で、どんな小さな事でも誉めて下さる。すると、こちらも何だかその気になってしまう。そして、時には冗談を交えつつ高度な研究理論と中国語音韻学の面白さを私に教えて下さったのである。

先生の思い出には必ずお茶とお菓子、時には果物が登場する。3年生の時、研究室で授業中に、先生が突然机の引き出しからリンゴや柿を取り出し皮を剥き始めた時は、さすがに驚いた。その後も様々なお茶やお菓子が登場し、先生のお陰でまさに「口福」を味わうことが出来たのである。

先生の楽しいお人柄が自然と学生にも伝わるのか、研究室にはよく学生が遊びに来ていた。また、昨年の1月に行われた退職記念講演会には大勢の学生や卒業生が来場し、先生がいかに多くの人に慕われていたのかを再認識したのである。

授業中はよく冗談を飛ばしていた先生であったが、研究や仕事に対しては常に真摯に取り組まれていた。いつのことだったか先生は、退官後は郷里の山梨に戻るが研究は続けたい、とおっしゃった。その時に「研究をやめたら自分が自分でなくなるような気がする」と言われたのが、先生の人となりを表しているようで今も心に残っている。

思えば先生にご指導頂いた7年間、特に一対一で教えて頂いた大学院の演習の時間は実に贅沢で貴重な時間であった。それを何よりの財産として、また先生の最後の弟子として精進する所存である。

長い間お疲れ様でした。そして、色々にご指導頂きありがとうございます。一層のご健勝をお祈り申し上げます。

山 村 敏 江